

高次脳機能障害

脳を損傷した影響で言語や思考、学習などの能力に支障が生じた後、記憶力の低下にもつきながら、7回の受験を経て行政書士の資格を取った男性がいる。障害の特性を客観的に高次脳と向き合って生きる男性は「障害が自分を大きく成長させた」と体験談を寄せてくれた。

(山下 豊)

男性は、福岡県久留米市で行政書士事務所を興す田端浩一さん(39)。高次脳の当事者は感情をコントロールできず怒りっぽくなる傾向があるが、対面した田端さんは柔和で温厚な雰囲気が出ている。「怒って感情を爆発させてしまうため、いつも落ち着くように心掛けています」。ゆっくりとした口調で、自分の歩みを語りくれた。

2008年4月、27歳だった田端さんはバイクで仕事から帰る途中、車と衝突する事故に遭った。脳内出血がひどく、救急搬送された病院で一命を取り留めたものの脳損傷や体のまひ、骨折などに加え「高次脳機能障害」と診断された。この頃から重度の記憶障害が現れた。入院中は家族の名前も、友人がお見舞いに来てくれたことも忘れた。排せつや空腹の感覚も分からなくなり、退院後も自宅ではトイレに長時間も寄り、食事や菓子を食べ続けて10日近く太った。

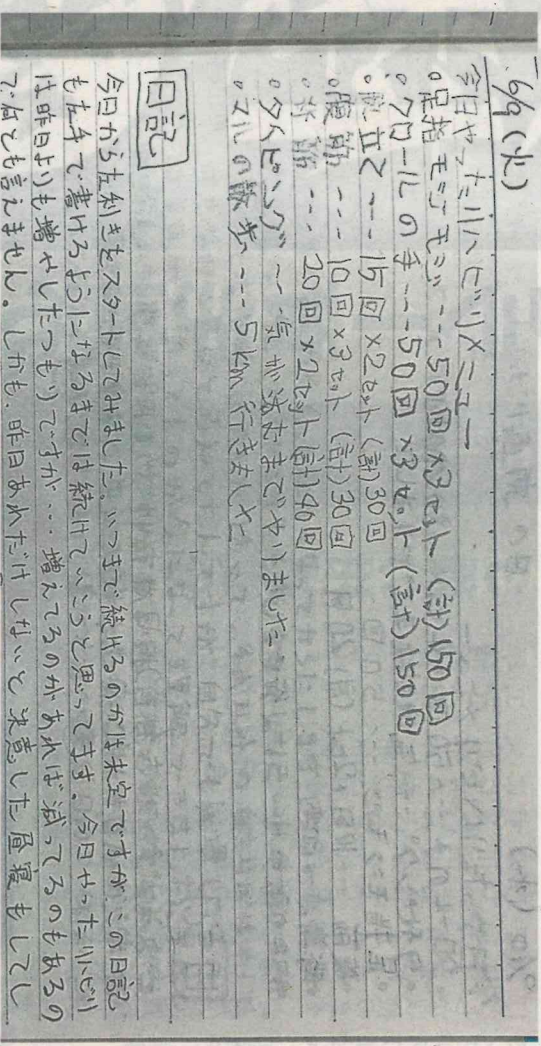
「頭の中」見つめ直して社会復帰

読者の反響

高次脳機能障害



久留米市の田端さんが体験談



両親との衝突も絶えなかった。通院に付き添う母に立ち、怒鳴って泣かせたこともあった。一眠りするよ自分の言動を忘れてしまったため、両親の冷たい態度にまたいら立った。何であんなことを言ったのだろ。う。一時的に後悔しても、それを忘れて同じことを繰り返す日々。生きる意味を見つけれず、自殺も考えた。

自宅でリビングの筋トレや散歩は続け、合間合間に漫画を読んだ。最新巻まで読み終えるとストリーを忘れていて、また1巻から読み直す。それを繰り返すうち、不意に話の続きを思い描けることがあった。無意識に内容を覚えていたことに気づき、「こんな俺でも時間をかければ覚えられるんじゃないかと希望を感じた。事故前は美容師として働いていたが、右半身がまひし、手足を動かしながら会話することができなくなった。「体よりの頭を使う仕事の方ができるかも」。将来を考えるうち、行政書士を目標すと決めた。

実際に勉強を始める時、簡単な日記

写真②高次脳機能障害になった行政書士になった田端浩一さん
①事故後の田端さん。右半身がまひして日記をおひきして書く練習をしていた

7回受験して行政書士に 現状受け入れ「一日一生」

医療 いのち

ではなかった。参考書をめぐる人だ。何でも忘れるように、長所と考えるように、日記をつけて、また覚えたいと気象に考えた。

行政書士は、法律知識が必要だが、2週間すると勉強から遠ざかり、漫画ばかり読むようになった。そんな頃、病院で車椅子に乗った若い男を見かけた。目が合った。男の目はきらきらと輝いていた。必死で生きようとする力強いまぶさに、ふさぎ込む自分が情けなくなつた。「あの子に比べれば、自分の障害はちっぽけなのだ」。電に打たれた気分、勉強を再開して16年1月、7回目の試験で合格した。

高次脳となった自分を見つめるうち、田端さんは脳内で起きる3つの現象を自覚した。頭の中心にある大きな渦に手を入れるイメージを浮かべると、過去の記憶が映像で流れる「記憶のハブ」。「誰かと話す際、脳に負荷がかかり、ブレーカーが落ちるように意識が遮断される記憶のショート」。そして、左手で文字を書く。支えてくれた足にはまひが残り、訓練した録に従うことを徹底する。右手自分の記憶を疑い、書面の記述に従うことを徹底する。左手脳内で別人格2人の声が聞こえる自分と話し合いをする「三考会議」。

それぞれを客観的に分析して、高次脳になると、昔の自分に戻つとする人が多い。でも、過去の脳科学の書籍を読みあさった。印象に残ったのは、記憶力を競う大会で優勝した人が、物事を忘れることができず苦し

「高次脳になると、昔の自分に戻つとする人が多い。でも、過去の脳科学の書籍を読みあさった。印象に残ったのは、記憶力を競う大会で優勝した人が、物事を忘れることができず苦し

【メール】 med@nishinippon-np.jp

【フックス】 092(711)6246

【郵 送】 〒810—8721(住所不要) 西日本新聞医療取材班

医療面へのご意見、ご感想、情報をお寄せください。「医見異見」への投稿も募集します。紙上匿名はできませんが、氏名、連絡先を明記してください。